

日本歴史言語学会 2016 年大会

研究発表要旨

ポスター発表

和田忍（東京都市大学・講師）

後期アングロ・サクソン・イングランドにおける異教徒 *hæðan* の語彙について
—Ælfric の古英語散文 *Lives of Saints* の説話を中心に—

5 世紀におけるアングロ・サクソン民族のイングランド征服以降、その征服者はゲルマン民族の信仰を持った人々であったといわれている。その後イングランドが国としてキリスト教を受け入れた後、再び異教徒のヴァイキングに襲われることとなる。そこで、本ポスター発表では、ヴァイキングの襲来時における文献に表れる異教徒 *hæðan* の語彙について調査内容を扱いたい。使用するテキストは 10 世紀から 11 世紀にかけてイングランドで活躍した聖職者 Ælfric の古英語散文『聖人伝』 *Lives of Saints* (以下 *LS*) である。*LS* において、特にイングランド土着の聖人の説教を中心として、「異教徒」の意味である *hæðan* の語彙が当時のイングランドにおけるヴァイキングの影響を強く示す箇所として表れていることを文献学的見地から示してみたい。さらにテキストの考察から著者である Ælfric がヴァイキングの脅威に対してどう感じていたのかも併せて考えてみたい。

神山孝夫（大阪大学・教授）

印欧諸語における rhotacism の発生原因について

ラテン語の例えば *flōs* “flower” の末尾の *s* は、単数属格形 *flōris* において *r* に交替し、類例は枚挙に暇がない。この rhotacism と呼ばれる現象は、[s] が有声音である母音に挟まれるときに、同化によって有声化し、[z] を経て歯茎ふるえ音 [r] に転じた結果と説かれることが多い。また、英語の *was* と *were* (古英語 *wæs* と *wære/wæron*)、*us* と *our* (古英語 *ūs* と *ūre*)、ドイツ語の *Verlust* “loss” と *verloren* “lost” 等々に見られるように、ゲルマン語においても Verner の法則の作用によって同じ現象が現れ、他方ではギリシア語 *καθέδρα* “seat” に由来するフランス語の *chaire* “status” (古仏語 *chaiere*) と *chaise* “chair” には逆に [r] > [z] の音変化が観察され、また英国の難読地名として有名な *Worcester* が [ˈwɒstə] と発音されるに至った背景にはどうやら

[rs] > [zs] > [ss] > [s] という音変化が隠れている。

単に声帯の振動が加わるだけの [s] > [z] は容易に予想できる自然な音変化である反面, [z] と [r] は有声性を共有し, 調音位置こそ接近しているものの, その様式は大きく異なり, 摩擦音がふるえ音に, あるいはその逆に転じることなど通時音韻論的に異常なことと言ってよい。では, なぜ印欧諸語にこの変化がまま生じるのか, その原因について温めた試案を報告する。

黒田 享 (武蔵大学・教授)

派生形態素の機能希薄化

ドイツ語の動詞 *bezuschussen* 「補助金を与える」は名詞 *Zuschuss* 「補助金」から派生された動詞だが, 基底動詞となるべき **zuschussen* が存在しない。そのため, $[Zuschuss]_N \rightarrow [*[zuschuss]_{N-en}]_V \rightarrow [be-[*[zuschuss]_{N-en}]_V]$ という派生経路は考えられず, 接頭辞 *be-* は動詞から動詞を派生する要素としては機能していない。だが, 古高ドイツ語では名詞から派生された動詞については接頭辞を伴う形と基底形の両方があるのが基本的で, 接頭辞が派生形態素として機能していると言える ($[dah]_N$ 「覆い」 $\rightarrow [[deck]_{N-en}]_V$ 「覆う」 $\rightarrow [bi-[[deck]_{N-en}]_V]$ 「覆う」)。 *bezuschussen* に伴う *be-* のようなケースは多くあるが, 派生機能が歴史的に希薄化した結果であると考えられる。

ドイツ語では派生機能が希薄化した派生形態素がしばしば見られる。 $[Pein]_N$ 「痛み」 $\rightarrow [[pein]_{N-ig-en}]_V$ ($*[[pein]_{N-ig}]_A, *[[pein]_{N-en}]_V$) 「痛みを与える」に含まれる (本来) 名詞から形容詞を派生する *-ig* もこれにあたる。近年議論されることの多い, 本来なら動詞から形容詞を派生する形態素 *-bar* を含む *unkaputtbar* 「破壊しえない」もその一環だろう。

本ポスター発表では, こうしたドイツ語における派生機能希薄化を多角的に議論したい。

口頭発表

1.

韓炅濤（東國大学校・講師）

東京大学図書館所蔵清原宣賢の訓点本『中庸章句』と『經典釈文』の比較研究

本稿では、大永8年（1528年）に吉田兼右が書写した清原宣賢の訓点本『中庸章句』に現れた声点、仮名音注及び訓註を『經典釈文・第十四卷』に現れた「中庸」の音切（直音と反切）と比べて、「中庸」の音義がこの資料に如何に反映されているのかを確認する。これの為に、本稿では以下の様な方法を使って研究する。

- 一、『經典釈文』の主なる版本は、中国の黄焯（2007）が整理して注釈した『經典釈文彙校』の本文と注釈に依る。
- 二、特に意味の対応を観察する時、清原宣賢の訓点本『中庸章句』と対応する『經典釈文』の音切に該当する意味が示されていない場合、『広韻』、『集韻』及び孫玉文（2015）の『漢語変調構詞考辨』との比較検討を通じて結論を出す。
- 三、清原宣賢の訓点本『中庸章句』の資料に対しては、『經典釈文』の音切との対応がある声点・仮名音注及び訓註を検討する。

2.

松本飛鳥（ワルシャワ大学・准教授）

ロドリゲス『日本大文典』における複合動詞と *particula* の関係性について

本発表はロドリゲス『日本大文典』（1604–1608）に記述される複合動詞の体系とそこに現れる *particula* という文法用語の概念についてである。ロドリゲスは複合動詞に特化した章を設けなかったものの、*modo da acção*（動作様態：現代の言語学用語である *Aktionsart* が提唱された Agrell（1908）より3世紀遡る）を前項動詞が表すものと *particula* の役割を果たすものに二分している。後者はさらに *honrar*（尊敬）、*abaxar & humilhar*（謙譲）と *significar mais*（意味の追加）の3つに下位分類され後項要素が助動詞・補助動詞に相当するものについて述べているが、3つ目の例には *sase & se*（使役の助動詞）と並んで *vchi*（打ち）、*voi*（追い）、*voxi*（押し）、*faxe*（馳せ）、*ai*（合い／相）、*tori*（取り）が挙げられていて、ある動詞が複合する際は別の動詞と組み合わせるか *particula* と組み合わせるという語形成レベルの区別を打ち出している。

これらの記述からロドリゲスがい用いる *particula* の概念について当時のポルトガル語・フランス語・ラテン語のそれと比較し、いかにして日本語の複合動詞の記述に援用されるに至ったか考察する。また、単純語・複合語という語に纏わる「一語らしさ」という観点から後の印欧語比較言語学や言語類型論における *particle* との差異についても考えてみたい。

3.

南徳鉉（東北大学・大学院生）

シベリアの諸言語におけるロシア語的な関係節の発達の促進に関わる言語内的要因

近年シベリア地域の多くの言語がロシア語をモデルとして分析的な関係詞と定動詞を使った後置関係節を発達させている。本研究は社会的な観点ではなく言語内的な観点から、受容側の言語においてその発達が促進されると思われる3つの条件を提示する。

第一の条件は、関係節に関して接触以前から供給側の言語と共通点を持っていることである。ロシア語との接触以前から後置関係節が存在したエヴェンキ語、定動詞を使った関係節が存在したケット語と森林エネツ語がこれを満たす。第二の条件は、模倣する際、供給側の言語に徹底的に忠実である必要がないことである。ロシア語と矛盾するように、（疑問詞ではなく）指示詞を関係詞に文法化させたケット語と森林エネツ語、関係詞による複合関係節を必ず文頭に置く東ハンティ語がこれを満たす。第三の条件は、模倣によって、共通項が関係節内で果たせる文法機能が増えることである。エヴェンキ語、ケット語、森林エネツ語がこれを満たす。

以上のような文法的な要因がロシア語的な関係節のシベリアの諸言語への導入を円滑にしており、また他の言語同士の場合も同様の現象が存在すると思われる。

4.

LAKER, Stephen（九州大学・准教授）

Dental fricatives in Early and Modern English

Dental fricatives were generally abandoned in Germanic languages with the exception of English and Icelandic. Their elimination started in South German territory in about the 8th century and spread northwards reaching inland Frisian dialects around the 14th century and more isolated island dialects between the 16th and 19th centuries (Laker 2014). The long survival of dental fricatives in English has sometimes been attributed to early Celtic contact (Hickey 2016), but since English (like Icelandic) was from an early date no longer part of a Continental dialectal chain, and not exposed to the same type of interdialectal contact, it did not follow the same pattern of change. However, the Medieval Kentish dialect is sometimes viewed as an exception in this regard (Samuels 1971), so in this presentation this dialect is subjected to a closer analysis using the *LAEME* corpus. Other interesting dialectal developments of dental fricatives are sketched in the presentation, but they appear to have occurred independently in English and share no causal link with changes in closely related languages on the Continent.

5.

神田和幸（NPO 手話技能検定協会・理事長） 手話の源流調査と手話歴史言語研究の方法の提案

手話の源流調査として 2015 年度、新潟県佐渡市地域に於いて未就学聾者の現地調査を実施したので、その分析結果の一部を発表する。手話の歴史的研究は明治以降について、辞典類や希少な文献を分析することで通時的語彙変化の一部がわかる。一方、地域方言や現代の言語変種の共時的変異を見ることで、通時変化と共時変化の比較が可能である。

聾者は民族性がなく、巷間に流布する「手話＝聾者の言語」という短絡的な神話は誤りで、聴者との接触による協働により発展してきたと見るべきであろう。とくに語形成過程では聾教育と通訳の影響が強い。その原点が聾教育を受けていない未就学聾者に見られるという仮説を提唱し、手話の言語接触による歴史言語変化モデルを提唱し、手話歴史言語研究方法を提案する。

6.

黒田享（武蔵大学・教授） 古高ドイツ語脱名詞動詞の形成法

ドイツ語の脱名詞動詞はその形成に際して見られる意味的・統語的パターンに応じてタイプ分けが可能である（例：「道具動詞」(*Geige* (バイオリン) → *geigen* (バイオリンを弾く))、「授与動詞」*Lob* (賞賛) → *loben* (褒める))、「位置動詞」*Land* (土地) → *landen* (接岸する) など)。

現代ドイツ語では、こうしたタイプごとに脱名詞動詞と接頭辞との関係が異なる。例えば授与動詞は非分離接頭辞を伴うことが多く（例：*Dach* (屋根) → *bedachen* (屋根をかける))、位置動詞は分離接頭辞を伴うことが多い（例：*Tisch* (机) → *aufischen* (食卓に出す))。道具動詞は接頭辞を伴うことが少ない。

ところが、このタイプごとの形成法の差異は古高ドイツ語では顕著ではない。また、このような接頭辞の分布は通常の動詞派生では見られない。ドイツ語の脱名詞動詞形成における接頭辞の働きは歴史的に見て独自に確立したと言える。

7.

笠松直（仙台高等専門学校・准教授） 仏教混交梵語文献におけるアオリストの問題再考 — *abhūṣi/abhūṣīt/abhūt* の用例検証 —

仏教混交梵語 (BHS) は、所謂古典サンスクリットと中期インド語 (MIA) とが混交したかのような特徴を示す、初期大乘経典の言語である。研究史上、「古層の文献はアオリストを用い、新層の文献は直接法過去や完了形等を用いる」とのテーゼがある (季羨林)。

総論としては申込者も同意する。しかし個々の語根に即して精査すれば、示唆的な特徴が看取される：『法華經』では、*bhū* の s- アオリスト形 (*abhūṣi*) の用例は詩文に、語根アオリスト形 (*abhūt*) は散文にほぼ限られる。

この際、MIA (例えばパーリ語) で、s- アオリストに基づく形の使用が圧倒的であること、パーニニが語根アオリストを使用すべく教える (II 4,77) ことを想起すれば、以下の仮説が得られよう：詩文の s- アオリストは“生の (古い)” 言語の痕跡を示し、散文の語根アオリストはサンسكريット語化を経た形である。

中央アジア所伝本が一部散文中にも *abhūṣi* を持つことも興味深い。

本発表は、調査対象を *bhū* のアオリスト形のみに絞り、用例を精査することで、BHS の言語層検出に新たな知見を得ようとする。

8.

堂山英次郎 (大阪大学・准教授)

印欧祖語の接続法接辞について —古アヴェスタ語資料の検討—

印欧祖語における接続法接辞は、伝統的に幹母音 (thematic vowel) と同じ **-e/o-* とされてきたが、近年これを laryngeal を含んだ **-He/o-* (**-h₁e/o-*) とする説が E. Tichy ほかによって提案されている。しかしながらこの説は事実上、古アヴェスタ語の韻文において、幹母音動詞の接続法がしばしば語幹末母音 *-ā-* を2音節で計量するという現象にのみ基づいており、他の印欧諸語による証言を欠く。これに対し、逆に古アヴェスタ語の現象を類推等による二次的現象と捉える立場がある。本発表では、古アヴェスタ語の資料を詳細に検討することにより、2音節の語幹末母音を持つ接続法語形とその分布を、インド・イラン語派の音韻変化及び動詞形態論の観点から解釈し、上記両立場を再検証するとともに、印欧祖語に再建されるべき接続法接辞を確定することを目指す。